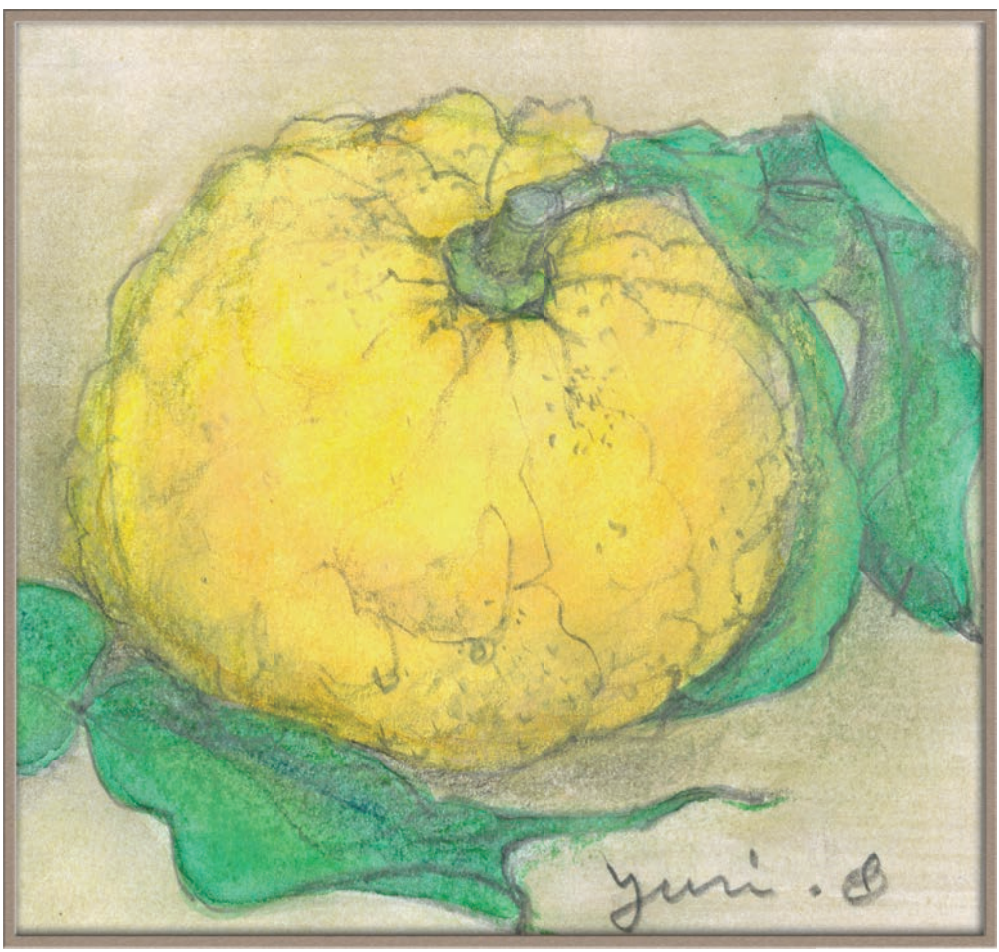
三河アララギ

２０２２年 令和４年２月 如月（きさらぎ）

二　月　号

第 六十九 巻　　第 二 号



ニューヨーク日記（184）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

MOST INCONVENIENT?

Blue Shoe Diaries

日向がある場所には必ず猫が昼寝しに来る。それがどんなにも（人間に）不便な場所であっても。今年は長く留守する事が多くて毎回一番帰るのが待ち遠しい理由はこの少し不便で面倒なかわいい問題でした。コンピューターのキーボードを座布団にして足やお腹で間違ったパスワードを打ちまくるシャーロック。隣で爆睡して寝返り打ちながら体当たりしてくるこの猫。朝ごはんに卵を料理する時卵を割った瞬間どこに居ようが猛ダッシュしてくるこの猫ちゃん。ほんと、留守したくなくなるよね。また留守するけど日本から沢山ちゃおチュール持って帰って来るからね！

Wherever there's a sunny spot, the cat will come to nap. No matter how inconvenient a spot it may be (for the human). I found myself away from home a lot this year and this little annoyance was the thing I missed most. Sherlock, typing away the wrong passwords with his belly as he napped on the keyboard; falling asleep on my feet so I wouldn't move; or sprinting to the kitchen whenever there were eggs for breakfast (he likes them scrambled). It really makes me not want to go anywhere. I'll be away again but I'll bring home a ton of ciaochuru from Japan!

目次

第六十九巻第二号（通巻八一八号）

表紙・獅子柚子　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記（184）　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「續々草々」　今泉　米子（5）
三河アララギ歌集　神谷　力（6）
三河アララギ歌集　小野田昱代（7）
「古稀」の電話　岡本八千代（8）
クリスマスイブ　弓谷　久子（10）
生命の歴史　今泉　由利（12）
ひつじ田は　安藤　和代（14）
励ましありて　清澤　範子（15）
新たな誓い　伊藤　忠男（16）
冬の月　矢崎　直人（17）
菰巻雪吊り　森岡　陽子（18）
宮浦の行在所　白井　信昭（19）
宝となりぬ　杉浦恵美子（20）
冬至の近し　山口千惠子（21）
月の出より　夏目　勝弘（22）
『ことよせ』　いーはとぶ　吉見　幸子（24）
牧原　正枝（24）
森　厚子（24）
山﨑　俊子（24）
伊藤　晴江（24）
三田美奈子（25）
水野　絹子（25）
牧原　規惠（25）
稲吉　友江（25）
鈴木美耶子（25）
現代学生百人一首　東洋大学
ダシルバ龍杏（26）
野中あおい（26）
弘海　瑠奈（26）
臼井　寛（26）
長島　忠育（27）
飯田　美沙（27）
有村　彩花（27）
髙松　大雅（27）
森岡　陽子（28）
贈呈誌
童謡『嗚呼　久留里城』　高橋　育郎（30）
『俳句』
松本　周二（32）
森岡　陽子（32）
浜田　紀政（32）
重野　善惠（33）
山元　正規（33）
植村　公女（34）
今泉　如雲（34）
今泉　由利（34）
木村　歩歩（35）
矢崎　直人（35）
濱田　紀政（36）
かさね吟行会
『酔いの徒然』（118）　丸山酔宵子（38）
楽しい時間（111）　山本紀久雄（40）
絹の話（135）　今泉　雅勝（42）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（44）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（46）
初狩便り3　花野みぷり（48）
『〝後期高齢者〟に思うこと』　中屋　保之（50）
春初崇朝の桜台楼　桜台楼主人（52）
在宇宙　今泉　由利（54）
康鍼治療院　玄　翁（56）
「氷魚」のことから（253）　岡本八千代（58）
編集室だより　今泉　由利（59）
「三河アララギ」について　（60）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

山田寺阯　橿原

足腰のさだまらなくに指(さ)してゆく憑(つ)かれしごとく山田寺の阯

橿の實のひとつのいのち拾ひ来て国の肇(はじめ)のあとをけふゆく

御手洗(みたらし)に水照り反す汀には異国の白鳥を飼ひ汚したり

枝重く黄にみのりたる橘の下照る斎庭(ゆにはゆ)たかすぎたり

菘翁書碑

鞘堂(さやどう)の中の石文を格子戸に額(ひたい)ひた押しなほ読みがたし

碑の面の蝕に眼をこらしゐて狭き寺の阯の木立さへ見ず

石にのこる文字は細書きの楷書にて冤罪雪(えんざいそそ)ぐまことこもれる

見臺に對ひて正坐の繪なりけり幼きよりわが知る貫名海屋(ぬきなかいおく)

菘翁(すうおう)の手の跡のこる寺の址蕪(かぶら)の畝(うね)みじかし冬に入る

青石の板碑の文字のうすれつつ光射し入ることもなからむ

歌集「續々草々」

今泉米子

いまは冬木曙杉（メタセコイヤ）は金堂の屋根を凌ぎてそびえつつ立つ

爪剪りてそれより何を為しにしか待ちし日曜日はやき夕ぐれ

ダイヤガラスに西日きらめき暖かしわが診療室午后は休診

くれなゐの紅梅のつぼみ一粒づつ露の玉光りて雨止みにけり

ガラス戸に風の音あり雨止まむ羅臼の昆布切りつつゐたり

白玉椿咲きはじめたり剪らむかな君の備前の雙耳の壺に

丹と白と桃色八重と明石方老いの二人の椿屋敷にぎはし

部屋ごとに椿を活けて折々に花落つる音にわれは驚く

塀沿ひを櫻並木にと植ゑしめてはやも老木なり染井吉野は

ほのぼのと花明り映ゆる窓のうちに今日の注射器の消毒の音

三河アララギ歌集

神谷　力

燃焼器の灰より拾ふ小石には昨夜落しし火のぬくみあり

腹這ひて撹拌機よりうどん採る吾の右手の冷ゆる朝の間

うどん練る水の芥を拾ひをれば朝の暗きに目の慣れて来つ

灯を下げて夜業はじむる吾ら五人残業手当のなきを言ひつつ

許されて今日の眠りにつく吾ら十七時間を働き終へて

三時間眠りたるのみ吾等にて年越しそばを箱に詰めをり

わが打ちしうどんの煮ゆる匂ひして青白き湯の釜はしづまる

今日は少し固く練りたるうどんなり茹でれば味のよき匂ひして

一日のうどんを打ちて手を洗ふうどんに荒れしてのひらと指

音立てて鳴る十円貨よ受け取りて暑き日なかを商ひてをり

三河アララギ歌集

小野田昱代

どの間にも答へ得ぬ一人想ひつつ試験問題一つ加へぬ

靴に入る砂気にしつつ従へば吾が足跡の小さく竝べり

君がこと心占むる日多くして水霜の道今朝も出でゆく

遠く来しいで湯の宿の一夜明け素足の白き君と知りたり

かすかなる胎動しきりに続きゐて長き会議の終り近づく

滲み出でし乳の冷たく伝はるを感じつつ午後の授業続くる

離乳進む子の粥に入れむと温かき卵を握り鶏舎出で来ぬ

洗濯に行きては一つ宛拾ひ来る石は白じろと花壇囲みゆく

夫の居ぬ今日は壁際に片寄せて宵早くわが床をのべたり

来む春は三人の吾子の食ぶる苺広く植えむと穂草引きゆく

「古稀」の電話

蒲郡　岡本八千代

東京より七十歳になりし娘の電話泣きてゐるらし感謝の電話

わが娘知らぬ間に古稀となりたるか独り住む西浦の夜は更けつつ

渦(うず)巻の蚊取線香のうすけむり冬にもくゆらすこのうすけむりよ

「うつり香」という便箋に今宵のこと書きとめておくなぜかは知らず

わが歌を書きつつあるに東の方はやもしらじらとオレンジ滲(にじ)む

広告など読まずに忽ちかたずけてしまふほどわれはああ老いにつつ

隣の人小さき油の取次所もつひに壊(こわ)され本宅に住まわれしとぞ

空場所もただ車置き場に代わりたりやはり私も淋しくなりぬ

夕飯(めし)はあつあつにせしわが雑炊小丼いっぱいたちまちにして了へつ

やうやくに二日続きに空晴れて庭師さん三人が来て下さる

コロナ禍のためにお茶出さずコーヒー代をあげて休んでもらひぬ

庭師さんもわが教え子よ老婆になりしわれに優しくありがたきかな

歩けなく動けなくなり家の中にたゞはらはらとしているわれかな

三ヶ所の部屋に令和四年のカレンダーとりつけて日暮れとなりてしまいぬ

またいつものエプロンかけてペンを持つメ切りせまる書きもののため

クリスマスイブ

豊川　弓谷久子

散り果てし公孫樹の枯葉踏みて行く久しぶりなり奥山の路

人の無きこの細道に彼岸花の葉のみ繁りぬ緑色濃し

彼岸花の別名葉知らず花知らずと教えてくれし人ありき

日向にて宛名書きをり椿の花を子が描きくれし年賀葉書に

十枚に満たぬ賀状を書き上ぐる差し出す先の少くなりぬ

風の便りコロナ病まるると今日聞きぬ快復されるを只祈るのみ

冬庭にアロエの花茎伸び立ちて花くれないに咲き並びたり

目白かと目を凝らし見るアロエの花に今日も寄り來る小鳥の二羽の

座したまま見るが嬉し軒先のアロエの花の二十本

クリスマスのショーウインドに飾りたし子は編みてをりお菓子の家を

ショーウインドに今年は並ぶ編みぐるみのサンタクロースお菓子の家も

ケーキより今年はおはぎと子の買いくれし心づくしのクリスマスイブ

スカートを一枚縫いたりこもりいるくらしも楽しこの気楽さよ

雪がチラリと舞いゆきて大雪となりたる地方の勞苦を偲ぶ

長く短かき一年なりきコロナの数に一喜一憂せし一年

生命の歴史

東京　今泉由利

太陽より一直線に来たれるを私の部屋に太陽満ちる

太陽より一億五千万キロを隔たりて頂度よろしき温度となりぬ

いま出(いづ)る冬の太陽背(せな)にしてスカイツリーの見えてゐる窓

35億年の生命の歴史に連なれる今日の私のいとほしくして

メタンとアンモニアとアミノ酸とタンパク質と核酸と原始細胞代謝の次第

充分に楽しく過してゐる地球このままこのままこのままが良い

天空にわずか小さしマイクロムーン名付きし道理ほんのり小さい

京都より三段重のお節の届く日本入国隔離中の子等

地球上の四千五百万種の生物のその一種にて今朝を目覚むる

雪華模様この天然の現象に同じ模様は一つだに無し

自らの思考には存在せぬことも宇宙のいとなみ素直に受くる

雪は降る同じ結晶一つだに無しと思ひて雪を見てゐる

人間の造りし物の何もないパタゴニア草原思ひ出(い)だせり

獅子柚子はムクロジ目被子植物門双子葉植物綱ミカン属ブンタン亜種と

山脈の向こうにもあり山脈はもっと向こふへ行きし人あり

ひつじ田は

豊川　安藤和代

ひつじ田は鳩の群れいて飛び立てば雀群れ来たりひと日短かし

土曜日は必ず娘からくる電話待ちいる時の心楽しも

ガスコンロ替えて十年もつと言う吾れも負けじとエプロン結ぶ

五十過ぎの息子の帰宅の遅いとて案ずる吾れは孫に笑わる

幼稚園からの友とは楽し電話なり同じ話で三度も笑う

亡母（はは）の里届きし大根関東煮含めば母の笑顔わきくる

肉じゃがに肉が多いとか少ないとかただそれだけで賑やかな卓

幼な日の孫の作りし風鈴が師走の窓に「チロリン」となる

寒き夜の雨音なぜか寂しくて父母に会いたし友に会いたし

敬老会名簿の中に君の名のありてうれしや冬の陽暖い

励ましありて

春日井　清　澤　範　子

名大病院にて斜視の手術を吾は受く高井先生一ヶ月の検診順調に回復
今年は夫を亡くせり悲しみにクリスマスには弟の訃報
吾娘の励ましありて吾は書く悲しみの歌ばかりなれども
斜視外来は順番待ちの人多数吾の診察夕方の五時
名大病院を出てタクシーはなく娘の手握りしめ鶴舞までを
娘に手を引かれ中央線鶴舞まで一二（いちに）〳〵と歩ききりたり
しっかりと娘に手を引かれ中央線の電車に乗りぬ
吾歩けた事心から嬉しいと褒めくれるはうれしきこと
斜視の物が二重に見えることなくなりて新聞を見るコロナの記事よ
堤防の川面に茶鴨一羽いていつにか見えざることの淋しき
車椅子に乗りて手術室に入る女医高井先生は待ちいて下さる

新たな誓い

大阪　伊藤忠男

願かける神も迷うか我が願い多くありすぎページはみ出す
一年の計は元旦あれこれと思い並べてメモにするなり
年明けて長き休みの一人部屋広げた本も虚ろに映る
何もせず何も思わず何も無し坐禅の心このここにあり
風の音なびく和歌山日が沈み影絵の町が現れるなり
歳(年)とも地球の周る速さ増し明日来る時を待つ暇も無し
年が明け家族集まり屠蘇に餅祝いの膳に朝日が注ぐ
伊達巻に昆布田作り豆にエビ懐かしお節今は過去かな
「凌」の文字凌ぎた先に明々と輝く世界暗示するなり
仏壇に一灯手向けて手を合わす東の窓から朝日射しこむ
ともかくも新し年に誓うなら身体労り和歌切らすまじ

冬の月

東京　矢崎直人

車窓より雲一つ無き冬晴れの北へ北へと線路は続く
雪靴の青森駅の売れ残り積りし雪に吾はまろうど
弘前に降る雪光跳ねて舞ふ地面に落ちる音の聞こえず
雪被り其処に存る木の一本の閑かに秋田佇んでおり
行き先で雪積り方訊き歩き話して歩く雪積り方
冬の鳥列を乱さず飛ぶ姿まるで大きな一羽の怪鳥
冬の風夢の中にて強き風吹かれて耐ふる夢を視ていた
冬の風ビニール袋宙に浮き大きく小さく右に左に
年用意街の活気に来る年の期待のこもる来年こそは
冬の月物音遠く青白く張り詰めてゆく空気は青く

菰巻雪吊り

東京　森岡陽子

散り紅葉紅と朱とのまじり合い美しくもあり儚くもあり
かさかさと日溜りの中枯葉ふむ一羽の鳩の音の軽やか
菰巻と雪吊り張りて観光と庭園冬の景色に変わるる
北風にバス停に届く侘しきはゴーンゴーンと寺の鐘の音
コロナ禍でマスクをつけし狛犬のマスク外ずるは二年振り成る
帰り花隠るる様に白い花春には堂々美しきかりき
街路樹の公孫樹落葉はつみ重さね滑らぬ様に膝まげ歩く
知らぬ間に我ヶ家の梅に蕾つく落ち葉をただただ掃いている間に
意味もなく置かれし瓶の雨の水今朝の寒さに氷うっすら

宮浦の行在所

豊川　白井信昭

東(ひんがし)の白にピンクの斑入(ふいり)花暗める中に花明かりして
宮浦の行在所あとに生うる木木悉く伐られ見通しの利きぬ
久久に豊橋駅に降り立ちぬ全面改装なりし店巡りゆく
月毎を詠み通し来て師走号わが五〇〇首まで
懐かしい民謡流れる店のなか青さ入り蕎麦妻と食べおり
生垣の擁壁の土留いく度も試行錯誤を繰り返しつつ
群雀刈田に落穂漁るのか飛び来てはまた飛び去りゆけり
堤防のマオウ刈られしひと処日本水仙咲き残りたる
家康の等身像と久久に孫とわが四人(よったり)岡崎城公園
小学生の頃遠足に来てよりはるか幾年ならむ時の刻めり

宝となりぬ

蒲郡　杉浦恵美子

九月来訪うことなくて今週末そろそろ行こうと思った矢先
ああ叔母さん母の話をもう一度しようと思っていたばかりなのに
取りあへず通夜には叔母の編み呉れし黒のニットを身に着けて出む
お手伝い何でもするわ叔母さんに母娘共々お世話になった
水代り蒲郡蜜柑ひと箱をクルマに積みぬ叔母の通夜への
叔母の孫最敬礼もきっちりと躾の厳しさ醸し出し居り
この叔母が我が為編みしもふもふの数あるニットは宝となりぬ
叔母逝きぬ娘が出勤せし後にひとりぼっちで別れも告げず
ブルートゥース調べてみても更に亦知らぬ語溢れて遂に諦む
世の中に付いて行こうと思へども意味の分からぬカタカナ日本語

冬至の近し

豊川　山口千惠子

一軒の家毀たれて更地になりいつもの町と様子変はりぬ
このあたり文房具店のありたりと広々更地になりしを見て立つ
とりたてて何もせず過ぐ一日なり早目に引きたり窓のカーテン
残りゐる令和三年はこれ一枚カレンダー破る一年早し
終ひには健康のことに落ちつきぬ久しぶりなり友よりの電話
美しく黄葉したる銀杏の木舞ひ落つる葉ひらりひらひら
夕方の五時を知らせるチャイムの音茜に染まる西空仰ぐ
庭隅に置きたる鉢に紅のネリネの花はひっそりと咲く
うず高く南瓜は積まれ売られゐる冬至の近し野菜売場に
暖かき目の続きゐる師走なり手袋わすれ自転車に乗る

月の出より

豊川　夏目　勝弘

今はもう太陽沈すめば布団に潜る眠ることを最上として
日の出もて起き出で夕べに床に入る縄文人のＤＮＡを持つ我も
縄文の人と同じのＤＮＡ現在この身に最適なこと
いと激しく降りくる雨にしんしんと音なく暗し背戸の桧原は
庭隅にこんもり繁れるアジサイに打ち降る雨の音の大きさ
百歳まで生きてどうするされどされど生きてみなければわからないこと
今はただ歩き歩むを第一と歩めば前に進みてゆける
還暦を過ぎて早や二十歳大還暦といふ言葉ありぬ

令和令和と八十余り書きて令和二年の準備を終へる

我が家に集まりくるは金ならず数種の落葉の最終地点

〆縄と庭の仕事は例年のこと雨の日少なく疲れがたまる

計画の通りに年末の仕事の進み今までになき喜こびのあり

宇都宮への普通電車の往復の十四時間にて読みし一冊

産土（うぶすな）の鳥居の前にてネズミならぬキツネに合ひぬ吉凶いづれ

初日の出見るは毎年同じ所寺よりの帰り梅林の近く

新しき令和二年も一日を一生として生きてゆきたし

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

友よりの皇帝ダリアやうやうに三年目にして莟つけたり　吉見幸子

我が茶室に訪れて六ケ月抹茶楽しみて友は逝きにき

毎食を一人すますが常となる今日の美味しさ何だったかな　牧原正枝

スムーズに指は動くよ左前の君のシャツ着る今日の予定よ

きらきらに秋の日顔に輝かせ一年二年のわが孫ら踊る　森厚子

吾が町の花火大会ドーンドーンと上がるが見ゆる家の部屋から

夕間暮れ湿り気多き庭にゐて微かに香りく藤袴かな　山﨑俊子

温き陽を背に受けて草を引く冬の庭草青々として

義母と我と娘と入る露天風呂秋の日光る海よ伊勢湾　伊藤晴江

義母と来て我ら歩みつつ土管坂「いつもおばあちゃんありがとう」とふ

お十夜を修めて仰ぐ夕つかた折りしも月蝕の黒き月かな　三田美奈子

別の名を「ベツレヘムの星」といふらしき青き花韮けふ咲き初めて　水野絹子

海苔そだの光る汽水湖葦の原往時を偲ぶ眺め変はらず　牧原規惠

院内の皓さくらくら大病院我が身の疵に気後れのして　稲吉友江

温暖なるわれ住む町はみかんの里スノータイヤの出番なきまま　鈴木美耶子

七十六歳天まで伸びる枇杷の木にわれは今日のぼりて枝を払ひぬ

老年期を楽しく軽らかに生きたしと佐藤愛子の本を読みたり

片時雨庭の狭庭に降り注ぐ金木犀の花散らせつつ

わが耳を笛の一声響かせて能「巻絹」を演者はそろりと

秋のゆくあなたこなたの今宵の空やうやく夏の打ち上げ花火

現代学生百人一首

東洋大学

小学生の部

ドンッとなりパラパラ散ったあの花火切ない思い強く心に

印旛郡栄町立安食台小学校五年　ダシルバ龍杏（りあん）　10歳

春風につくしがゆれる右左のっぽになるのまち遠しくて

印旛郡栄町立安食台小学校五年　野中（のなか）あおい　10歳

くらやみにライトてらすと百合の花白くかがやき道ばたにさく

印旛郡栄町立安食台小学校六年　弘海（ひろうみ）瑠奈（るな）　11歳

日本一大きい魚とならび立ち自分の夢と大きさ比べ

印旛郡栄町立安食台小学校六年　臼井（うすい）寛（かん）　12歳

ぼくの家かぐらなんばん育ててるドキドキ食べると舌がひりひり

長岡市立山古志小学校六年　長島忠育　12歳

群青の輝く水に入り込みキックとプルでベストを尽くす

松阪市立松尾小学校六年　飯田美沙　12歳

かぜひいてベッドでひとり目を閉じる外から聞こえただんじりの声

堺市立深井西小学校六年　有村彩花　12歳

10月の楽しいリズム地車(だんじり)だみんなでさけぶソーリャーオーリャー

堺市立深井西小学校六年　髙松大雅　12歳

贈呈誌

月虹　１４３号　２０２１年１２月

森岡陽子

○友と歩むのどやかな陽の武蔵野の民家に実る檸檬たわわに　山口京子

○何事もなかったやうに転がれり白き河原に氷期の巨石(いし)が　清水和子

○白ワインそそぎしグラスに十月の枝垂桜を透かして飲みぬ　井村喬泉

○ゆえもなくふと涌き上がる寂しさに遠く見つめる生きのいのちを　成島哲子

○またたきのやうな一輪そそとして狂ひ咲きかと問へど応へず　八幡道子

○木守りの柿の実一つ無傷なるままに朽ち果つ思えば不可思議　保坂征子

○草の葉を捉へ巻き込む渦のあり三日晴れしかば消えしまひぬ　鮫島満

冬雷　２０２２年　１月号

○木洩れ日の径はいつしか枝影を映しほそぼそ虫の声する　山口　嵩

○すずめにも沈思の刻があるらしきじつと動かず十分あまり　天野克彦

○舷に止まりて鴎は狙ひゐる競りに零れたる獲物狙ふか　田端五百子

○街路樹も科学の街では一データ計算による構成美なり　古田佐好子

○秋の日を背中に受ける道の辺にしがみつくがに蒲公英の咲く　本郷歌子

○最上川に懸かる大きな虹ひとつ覆ふ黒雲にたちまち消ゆる　早坂冨美子

○葉を落とすリシマキアの鉢動かせば株の周りの赤き芽の出づ　齋鹿ミヤコ

○我が庭の一本のカヘデ紅葉し散歩の猫が一葉着け来る　東　ミチ

嗚呼　久留里城

高橋育郎

上総の山は　花がすみ
遥かに仰ぐ　天守閣
千古の歴史　重ねきて
ああ美しき　久留里城

戦となれば　雲を呼び
雨をあられと　敵を撃つ
天を味方の　塞こそ
その名雨城と　伝わるる

国の文化の　礎を
築きし新井　白石が
学びの道を　修めたる
誉も高し　久留里城

悠久不落の　城なるは
天賦の地形に　いやまして
人の心の　揺るぎなき
至誠ぞ熱き　勲しや

『俳句』

凍空に流星群の尾の長さ
吾子と食ぶ映画の後の牡蠣フライ
絨毯にピアノの跡や年送る

松本周二

幼子の二人に三つ冬苺
冬至の朝うつすら残る白い月
大鷹に放列つくるカメラマン

森岡陽子

遥かなるコンビニの灯や虎落笛
奥多摩の連山蒼く寒波くる
枯葉舞ひ立ち漕ぎで行く女子校生

浜田紀政

滝の音聞くも寒かり旅の宿
古新聞に包む焼芋の素朴さよ
おでん煮て夕餉に添へる一人酒

重野善恵

冬の海昏れて国後はるかなり
ふるさとへ帰心もたらす柳葉魚かな
群青を墨絵に変へし冬の海

山元正規

生国で終の住家で寝正月
若菜粥ひとつ不足のままに炊き
願い事ひとつだけなり初詣

植村公女

大雪の列車待つ間の足湯かな
冬日没り映画字幕は戸田奈津子
十二月一日からや新手帳

今泉如雲

アボカドの種はじけたり冬日向
午後の陽のソファーに届く日向ぼこ
近寄りて枇杷の花香のそのなかに
鬼柚子をひとつ携へ会ひに来し

今泉由利

初霜に白き大根突き出たり
石段に箒の音や冬ぬくし
向かい家の瓦が光る冬の暮
いくつもの煙突雲や寒あかね
老人とあけぼの杉の聖誕祭

木村歩歩

東京を発つ新幹線冬の晴れ
弘前や舞ひ落ちる雪音もなく
雪被る木は其処に在り秋田かな

矢崎直人

かさね吟行会
「九品仏」十二月

濱田紀政

十二月十日、集合したのは東急電鉄大井町線九品仏駅。駅名や九品仏小学校、九品仏地区会館、九品仏商店街、九品仏交番などこの辺は九品仏を使用した施設は多く、隣の自由が丘駅は開業当時「九品仏前駅」だった。九品仏は今回吟行する、山号九品山・浄真寺の三つの阿弥陀堂にそれぞれ阿弥陀如来像が三体、計九体の九品仏が安置されている。九品仏は信仰の篤い者から極悪人まで九通りに基づいている。

冬日向古刹に残る落城史

正規

浄真寺の寺地は元は奥沢城だった。城主の吉良氏は豊臣秀吉の小田原征伐に立ち向かったが破れ城を失った。浄真寺の境内にも土塁や空堀跡が残っている。吉良氏は戦国大名として名が高く、日々戦争に苦しめられた地元民は九品仏に救いに求めてその名を使い続けているのだろう。

落葉降る秋芳の句碑掠れおり

紀政

境内に加藤秋芳の句碑がある。

しずかなる力満ちゆきはたはた飛ぶ

※はたはたは句碑では古称の漢字だがバッタである。

※江中真弓（評者）

「草叢で動かないのは力が抜けているのでなく、全身に力を漲らせているのである。次の瞬間、バッタは勢いよく跳躍した。思いがけない力強い飛翔に作者は感動している」

当時、秋芳は戦後の過労にあった。秋芳は人間の生活や自己の内面に深く根ざした作品を詠んでいた。

浄真寺に小さな鷺園がある。本堂の脇に鷺草の像が置かれ、参拝の女性達が絵馬を足に結んでいた。

この鷺草に一つの物語がある。

奥沢城だった頃、常盤姫という娘が城主の側室になったが、美貌に他の側室が妬み、常盤姫は不義の子を宿したと城主に告げた。城主は常盤姫を遠ざけ、悩んだ常盤姫は白鷺の足に文を結び父母のもとに放った。白鷺は狩りをしていた城主に射ち殺された。城主は常盤姫の無実を知ったが、常盤姫はすでに自害した後だった。

吟行に戻ると…。

緑青の門が切り取る冬紅葉　　素山
冬空を睨む仁王の大目玉　　善恵

駅からの参道沿いに明治三十二年に建てられた「禁銃猟警視庁」があり、進むと総門が見える。楼門（二階建て）である。カメラを手にした女性や老夫婦、子連れがて行く。浄真寺は紅葉の名所で今盛りである。冬紅葉は季語に冬になって色を際立たせた紅葉とある。

供養塔冬の紅葉の枝の影　　陽子
冬の庭風ふきわたる大銀杏　　しのぶ

前夜雨だったので幹事は心配したが景観を保っていた。

閻魔王のテープ流れて冬の寺　　さち子

閻魔堂の両側に「嘘つな」「悪いことするな」の真っ赤なノボリ立ち、スピーカーから音声が流れていた。「嘘つくな」「悪いことするな」

相変わらず新聞を飾る悪事は絶えない。もっと大きな音声にしたらと思う。

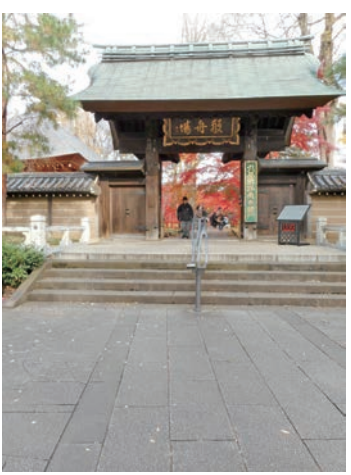
散る紅葉仏足石を覆ひけり　　京子

仏足石は釈迦の足跡を石に刻み信仰するものである。両足、片足があるが、両足を揃えたものが古く、浄真寺の仏足石は消えているが両足を揃えていたという。

寒禽の呼び合ふ寺は春に似て　　周二

冬紅葉の季語は先に書いたが、色を際立たせているとあるが、又、別に大半の葉は落ちているとある。だが、今日の紅葉は今が盛りに見える。

句は寒禽の声はすれど寺は春のようだと読める。これは今問題になっている気候変動かも…。



『酔いの徒然』（一一八）

丸山酔宵子

『駒沢公園の銀杏並木』

黄色く色ずいた銀杏の樹々が、澄み切った青空を突き刺すようにすくっと立ち、晩秋の陽に輝く姿は神々しい。特に神宮外苑絵画館前の銀杏並木は素晴らしい。

丁度早慶戦の頃にその銀杏が散り始め、路面に黄色の絨毯のように散り積もり、そして絵画館前から国道２４６号に続く銀杏並木が蒼天に向かって真っすぐに伸びている。

また、大阪では御堂筋の銀杏並木が有名で、もう半世紀以上前に鶴岡一人率いる南海ホークスが日本シリーズで巨人軍を破って、銀杏並木の御堂筋をオープンカーでパレードする姿を思い出す。

そんな素晴らしい銀杏並木が、我が家近くの駒沢オリンピック公園にもある。

元々は東京ゴルフ倶楽部と言うゴルフコースで、昭和天皇がイギリス王太子・エドワードとプレーしたところでもあった。その後、１９４０年東京オリンピックのメインスタジアム建設が計画されたが、日中戦争の激化により、１９３８年東京オリンピックの中止が決定された。その後、広大なスタジアム予定地は第二次世界大戦での空襲に備えた防空緑地や農地として利用されていたのである。

戦後１９５３年、プロ野球東急（東映）フライヤーズの本拠地として、東京急行電鉄が駒沢野球場を建設した。またその前後、１９４９年の第４回国民体育大会のハンドボールコートとホッケー場、１９５８年には第３回アジア競技大会のバレーコート、１９５９年の第１４回国民体育大会の弓道場と、それぞれ整備されて行った。

１９６１年には悲願の１９６４年東京オリンピック開催が決定し、駒沢公園には国立競技場に次ぐ第２会場として陸上競技場、体育館、屋内球技場、野外第一・第二球技場そして補助競技場が修理新設整備され、東京オリンピックではサッカー、レスリング、バレーボール、ホッケーのメイン会場となったのである。

その後も、ユニバーシアード東京大会、全国障碍者スポーツ大会、世界女子サッカー大会も行われ、並行して、サイクリングコース、トレーニング施設、テニスコート、オリンピック・メモリアル・ギャラリーなどが整備

新設され、現在の姿になってきたのである。また、噴水のある駒沢公園広場はイベント施設として東京ラーメンショー、ビヤ・フェスティバル、全国陶器祭りなどに開放されている。

新コロナ禍のこの二年に渡って、テレワークが続き、春夏秋冬二シーズン、昼食後、マウンテンバイクに乗って、駒沢公園周辺を一周するのが日課である。季節によって樹々の色も変わり、咲く花々も変わってくるが、緑豊かな公園をゆったりと、散歩やジョギングしている人たちを見ながらゆっくりとペダルを漕ぐのである。

どういう訳か、赤いタータンチェックの短いスカートをはいて、不器用なバタバタ足でジョギングをしている中年の男性、必ず同じ石畳に座って、新聞をくまなく読んでいる度の強い眼鏡をかけた老人、肉付きの良い巨体を揺らしながら直向きに歩くヨーロッパ系外国人。

「こんちはー。今日は暖かいですね・・」と、車椅子に座っている女性が声をかけてくる。名前も素性も知らないが、昔、銀座か赤坂でママをしていた風のしっかり厚化粧をした艶っぽい年増の女性。車椅子を押しているのは、茶髪に染めた髪を七三に分け、ヴィンテージジーパンを粋に着こなしている６０代の男性である。二人は同じルートをいつも同じペースで雨の日でも透明な河童を被って車椅子を押して散歩をしている。

「それじゃー。また・・」と、ペダルを踏みこんでスピードを上げ、今日は深沢の住宅街を通り自由が丘方向の目黒通りに向かう。もう一つの帰り方は柿の木坂を通って都立大学商店街方向に行くルートもある。

今日は、晩酌一杯のアテに、大好物「明石のタコ」を買いに、ここしか売っていないスーパー紀伊国屋に寄って行くのだ。

銀杏並木は目黒通りにも広がっていて、銀杏落葉が歩道を覆いつくしている。黄色い絨毯のような銀杏落葉へゆっくりとペダルを踏んでいく。

只管に家に籠りて日をめくり

舞う如く銀杏落葉へペダル漕ぐ

酔宵子

楽しい時間　111

山本紀久雄

2021年12月31日

九代目市川団十郎・・・其の十七

九代目は、足しげく鉄舟に屋敷に出かけた。この頃、鉄舟は元紀州藩の家老屋敷に住んでいた。九代目は鉄舟に何を求めて鉄舟邸に足繁く通ったのだろうか。九代目のことであるから、背景に相当の理由があったと思われる。

九代目は明治7年（1874）頃から、日常の生活空間に「古物」を持ち込み、「古武士を気取って力んで居」るようになってきた。この意味は、舞台面の「故実を正」し、時代考証を凝らした甲冑や武具をどれほど用いたとしても、それだけでは「迚も武士の精神は写され無い」と考え、「鎧の着やう、弓矢の骨法を心得」ていくことを通じて、「真実」の武士が実際に行っていた行為を自ら追体験していくことを思い立つ。

ここへのヒントは元土佐藩主山内容堂との、交流をかさねていくなかで得たものと通じる。元大名である容堂から漂う「大名の気風挙動」をもとに、「昔は斯うで有たらうと想像」していた。このことを『桜痴居士と市川團十郎』（東京国光社）が述べる。

《大名の気風挙動は容堂様の平素なさる所を見て大に発明しました。私は容堂様には厚く御贔屓に成て毎日のやうに、御側に出ました。其頃は昔と違って余程開けては御出なすったのだが、夫でもお大名の気風が何處やらに残って有て、昔は斯うで有たろう、那で有たろうと想像する事が出来ました》

ここで注目すべきは、九代目は容堂の「挙動」から垣間見える「気風」、すなわち大名の「精神」というべきものを会得しようと努めていた。つまり、山内容堂という「大名」を追体験しようとしていたのである。追体験とは、相手を真に理解するために、相手と同じ体験を自分もしてみることであるが、九代目の場合は、目にした対象から「想像」していく自らの「実感と精神」を「役」に獲得させていったのである。

これは知識や実感・想像を通じて、「精神」という内的世界を獲得する事であり、ある種の「芸の発明」と言えるであろう。

九代目は、山内容堂から学んだ大名という「精神」の内的世界を獲得したように、「真実」の武士である鉄舟から同様な「精神」の内的世界を獲得しようとしたのである。加えて、もうひとつの鉄舟邸を訪ねるのは、「貫くこと」の大事さを再確認する事であった。

鉄舟が一刀流の浅利又七郎義明に完敗し、以後、禅修行にまい進し、とうとう「大悟」という境地に達するまでの苦難の道。それは目的達成するまでやり遂げる、努力を重ね追求していくということに結びつくのであるが、それを実行した鉄舟を見習いたい。つまり、「活歴もの」を明治の歌舞伎見物客に理解させたい。受け入れさせたい。という望みもでもあった。

こうした努力の甲斐があって「九代目の芸」は、明治22年（1889）11月に開場した歌舞伎座の舞台にかけられるようになると、春日局を勤めれば「局か團州かと思ふ程嵌りたる役」（福地源一郎作『春日局』）と評され、加藤清正になれば「正真の清正かと思はる、嵌り役」（福地源一郎作『太閤軍記朝鮮巻』）と受けとめられ、見物客が「芝居とは思えない」「真実と見まごうよう」な印象を与えていくことになる。

九代目が目指した「役者―役―見物客」の内的一体化は、ようやく明治20年代になって、見物客にも「明治芝居」として認知されはじめたのである。

このように認知された背景には、少なからず劇場構造の変化、特に照明技術の進歩で「夜に入れども白昼に異ならぬ明るさ」が実現したことがお大きい。

江戸期の場内は、「牛丸太に葦簀張り」の天井から下がる提灯やろうそくの明かりで照らし出されていた。これに比して、明治期の歌舞伎座では土間の天井が轆轤張りになり、中央に設置された大きなシャンデリアを中心に、瓦斯灯、電気灯」が用いられた。

以下が歌舞伎座内部の様子である。（参照『東京風俗志』平出鏗二郎著　八坂書房）

明治の採光は、ろうそく・提灯から瓦斯灯、さらには電気灯へと画期的に進展していたことがうかがえる。

この採光の画期的な進展は、舞台面の意匠にも少なからぬ影響を及ぼしていった。舞台面の意匠は、場内が明るくなるにしたがい、以前にもまして見物客の目に鮮明な印象を与えていくことになる。そのため、それまで主流であった意匠の極彩色が抑えられ、より渋いものへと向かっていったのである。

「淡泊」な顔のつくり方や渋い色彩の衣装は、九代目が明治10年代から採用し、見物客に新奇な印象を与えたが、20年代になり、場内の採光が明るさを増していったことで、見物客に認知されるものとなり、さらに明治歌舞伎におけるひとつの傾向をなすまでに至っている。

この結果、「女形の口紅」という微細なものの濃淡すら判別できるほどになって、九代目が重視した顔の表情も、見物客の目にはっきりと映っていくようになっていった。

いわば九代目は、明るさを増しながら変化する場内の採光を十分に考慮し、「喜怒哀楽の念を観客に起こさせる」術を模索していたと指摘できる。

つまり、「団十郎の芸」は、歌舞伎座が「瓦斯灯、または電気灯」による採光と、明治5年（1872）10月に新開場した守田座の額縁舞台を採用したことで、一層見物客に「事実」として受けとめられるようになっていった。

しかしながら、九代目が孤軍奮闘する「活歴もの」、これに対しては見物客からは不評が相次いでいた。その事例を挙げれば『芳哉義士誉』の内蔵助を演じたときに、次のように述べたことからもわかる。

《然るに団十郎は是等を失敗の劇とは思って居なかった。世間の不評を耳にも掛ず確に成功したものであると信じて居た。義士誉に敗れた時、彼は得々として今度の狂言は成功した、毎日桟敷に貴族の方々を見受けると云った》（『桜痴居士と市川団十郎』東京国光社）

こうして九代目は「貴族の方々を見受ける」ことで、「団十郎の芸」を「文明」の芸と確信し、「中等以下の人」の目を顧みることなく「演劇改良」への志を貫き通していったのである。

だが、心中、さぞ苦しかったのだろう。その変化は意外なところから生じていく。次号へ続く。

絹の話（135）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

絹のマスクを作る

絹マスク制作の着想史

コロナが深刻な事態になって来た時、従来から声を大にして言い続けてきた絹の静菌性を活用したマスクを作る事を始めました。

私共には洋服を裁断した多種多様な野蚕の残布がありますので、それを活用する事にして、先ず糸が細く柔らかで多孔質（ヤママユガ科の繭に見られる特徴）なエリ蚕の絹紡糸平織りと綾織の琉球藍染め（天然染料の中では抗菌性に優れている）の生地を使い各種サイズの物を作りました。

次にインドのタサール蚕の無染色（茶色）絹紡糸（タサール蚕の糸は同じヤママユガ科の昆虫でもエリ蚕の糸より10倍も多い４００～５００の多孔を持ち糸の20％が空気）を使いました。（無地の裏地付き）

続いて同じタサール蚕の生糸地に手刺繍、木版染め、絞り染めなどをしたカラフルな物を作りました。

さらに常々絹の古着など有効利用を訴えてきましたので、使わなくなったネクタイを使ってみました。実に色柄が面白く注目される物となり、一つ一つ武将の名など固有名詞を付け楽しい物にしました。

また、インドアッサムでしか育たない希少で高価なムガ蚕の黄金糸の平織を使った型崩れしにくい、品（ひん）の良い物を作りました。

絹マスクの効用

1）絹は人間と同じ20種類のアミノ酸（人と配分率は異なる）で出来ていますので、人の肌によく馴染み、違和感がありません（親和性）。

2）絹の優れた放湿、保湿性機能と放温、保温機能でマスク内は夏季でもサラットして快適です。

3）絹の静菌性によりマスクに雑菌の繁殖が抑制されるので衛生的です。したがって数日使い続けても匂いも発生しません。洗濯は3日に一度位が適当かと思われます。何度でも使えて経済的です。

絹マスクの販売

絹マスクをデパートなどで販売を試みました。

価格が￥2、000～2、500と一般市販品と比べてやや高価ですので、なぜ絹を使うのか説明を求められます。熟慮し納得した人にポツリポツリと売れはじめまし

た。

この方々にはシンプルなエリ蚕の琉球藍染めが好まれ、その後もリピーターとなって下さる様になりましたが、この方々は私共の主たる販売品目の洋服にはあまり興味を示さず。シルクシーツなど健康用品に興味を持たれる傾向にあるようです。

一方、素材、柄が面白いと感性で求めて頂く人は決断が早いのですが、リピーターは少ないようです。

ともあれ、絹が日常使われなくなった昨今、絹マスクを通じて絹の心地よさが伝わり、絹需要が増えれば危惧される環境、健康問題に少しでも役立つのではないかと思っています。

絹マスクの事実上の販売禁止

昨年（2021）の初秋大手のデパートから今後自社性のマスクを販売するには国が求める多数項目にわたるエビデンスを公的機関で取得して、証明書を提出するように要請されました。

一つ一つ検査して証明書を作成するには経費と時間、サンプル生地提出（端切れでは無理が多い）など考えると採算に合わない可能性があり、また、日本の公的機関の絹の定義に野蚕絹が含まれっていない可能性（20年位以前まで野蚕絹は絹の輸入品番からは除かれていて、輸入手続き上は絹ではない）があるので野蚕絹として検査はされない可能性があり、公的機関は絹の機能性は認めていませんので検査する意味が有りません。販売を断念する事になりました。

不織布のマスク

不織布マスクは木綿などの織物素材より効果的に菌の通過を阻止できると云う理由で国か推奨するようになりました。国は不織布以外のマスクの販売を禁止しているわけではありませんが大手百貨店などは国の意向を忖度して、不織布マスクと公的機関のエビデンスが百貨店に提出された物以外は店頭での販売は禁止しました。

不織布マスクは世界の海を汚染している

市販の殆どの不織布のマスクは化学繊維のポリプロピレン、または外側がポリプロピレンで内側が木綿製です。基本的には使い捨てで、世界中で十数億枚生産され、そのうちの14％が既に海に流失したという報告があります。これらが海を汚染する大きな問題です。化学製品による世界のグローバル化が地球環境悪化問題を起こしています。コロナ禍が長引けば化繊のマスクも憂慮される事になります。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2021年12月20日
引き続きウィルス予防

今年も残すところ半月をきりました
最低気温も急激に下がり
慣れるまでは寒さが身に沁みますね
最低気温も下がり空気も乾燥すれば
当たり前ですがウィルスも元気になり風邪が流行ります
ということは
手洗い（ハンドソープ30秒すすぎ30秒）
緑茶や紅茶でのうがい
アルコール消毒（手のひらにたまりを作って指先を念入りに）
帰宅時の頭髪や顔のウィルスを落とす
玄関のたたきの消毒
換気または空気清浄機の活用
などなど
慣れてしまうとついつい忘れがちになってしまうようなことを
もう一度やっていきましょう
特に手洗いやうがいアルコール消毒や帰宅時のことは
習慣づけてやりましょう
今日も笑いながら行きましょう

２０２１年12月22日
好きな温かい飲み物を

ここ数年の自粛ムードが和らぎ
世の中はクリスマスムードです
いつも思うのが
クリスマスが過ぎると当たり前ですが
クリスマスが瞬く間に消えお正月ムードに変わります
この変貌ぶり流石ですよね　笑
寒くなると
空気が乾燥し皮膚から体内の水分が減っていきます
ただ　寒いと水分を欲しなくなります
外だとマスクもありますしね　笑
そこで
水分＝体温が下がる
というイメージを変えるために
あえて温かい飲み物だけを取るようにして下さい
それを続けることにより
水分＝体温が上がる
という様に水分補給すると暖まるという認識にしましょう
水分が不足すると循環が悪くなり
ウィルスが小便から排出せず体内の滞留時間が長くなります
そうすると感染率も上がります
頭痛
腰痛
身体の痛みや固さ
体温の低下
などの影響も出て来ます
好きな温かい飲み物をなるべく飲んで
循環を良くしていきましょう
今日も笑いながら行きましょう

「江上浩二の独り言」50

江　上　浩　二

厳しい Global marketing

9年前の事だが2013年2月初め、仕事でサンフランシスコへ出かけた。フライトの都合で（安いチケットで帰国曜日が指定されている）、1日オープンの日が出来た。そこで久しぶりにソノマ・ナパバレーにあるワイナリーツアーに参加した。

参加日に集合場所へ行くと私が予約したグループは、所謂米国を加えインターナショナルなお上りさんグループ。もちろんツアーの説明はバリバリの American English を喋るドライバー兼ガイドの比較的若手の部類のお兄さん。気が付いただけでも、カナダ、韓国、イタリア、フランスなどからの観光客、もちろん私が日本人で1人。仕事でのカンファレンス英語とは違い、久しぶりに生英語に浸り、感激した。

さて、ワイナリーは3箇所見学がセットされていた。2つはローカルで製造した美味しいワインで、輸出していないと言う。もう一つの大きなワイナリー（Sebastiani）は海外に手広く輸出していると言う。先に Sebastiani の話をしてしまうと、今やアルコール類は重たく手土産に瓶を持って帰る事が無くなってしまった。まあ、都内の店で探せば入手できるだろうと。

そこで、Sebastiani が買えそうな店を帰国後ネットで探すと、驚いた。仕事で頻繁に乗降する神田駅近くにYというワイン専門店があり、そこで Sebastiani が置いてあると言う事が分った。フライトで10時間かけ、さらに車で2時間かかる彼の地の美味しいワインが神田駅から1分で行ける所で手に入るのだ。これもグローバリゼイションの恩恵だろう。

他の2か所の小さなワイナリーは米国内でしか販売していないと言う。カナダからの客がカナダへも送ってもらえないのかと尋ねても、アルコール関係商品は色々と tax などの手続きがあって出来ないという。恐らく、輸出となると生産量の問題や品質管理の方も国際基準にのっとってやらなければならないのであろう。バリバリの英語をしゃべれる米国のワイナリーでも Globalization への足かせがあるのだ。ただ物流や輸出手続きだけならば、専門商社や輸出業者へ依頼すれば出来そうだが、オーナーさんの気持ちをそこまで動かすことは出来ないのであろう。

味に繊細で、ワインと食べ合わせる料理にまで気持ちが行ってしまうと、ただ自分のワインを輸出する事では済まないのであろうと善きに解釈した。フランス、イタリア、スペインなどは別として、もともと輸出業を目指して大規模なワイナリーが最近では南米、豪州・NZ、南アフリカで造られていて、品質管理も現代的手法で行われている。非英語圏のワインが輸出されているのに、ナパやソノマの米国産ワインが輸出出来ない所に、我々日本人が考えるべきグローバリ

ゼーションへの課題があると思う。

この久しぶりの日帰りワイナリーツアーに参加して、本当に良かったと感じた。また、Sebastiani のワインが神田駅の近くで入手できる事も分った。早速訪れて、赤２本、白１本を購入してしまった。この行動を直ぐに起こさせたことに〝成功〟したSebastiani のブランド Marketing は、無意識に私をそうさせたのである。

さて、ワイナリーツアーの４か月後に、少し真剣にglobal marketing について考えた。米国株式市場上場企業にはForm 10K という企業経営状況を詳しく説明した資料の公開が求められている。所謂企業業績、財務状況の説明に加え、Risk Factor という項目がある。過去幾つかの企業の Form 10K を査読した事があったが、最近（２０１３年当時）目を通した企業の Risk Factor の内容は定型的なものであるが、企業の Globalization を考える際に参考になる。

以下、ある企業の概要を意訳で示す。企業経営実績は海外売上があるが故に、常に変動要因が大きい。我社の売上で海外売上の比率が大きく、将来の成長に向けても海外売上の割合は増加すると予測している。従って海外売上に依存する利益はかなりの企業リスクであり、次のような要因がある。

外貨変動
規制の変化
関税や他の貿易障害
輸出許可状の申請タイミング
政治的、経済的不安定性
販売代金の回収時の難しさ
海外法人、事務所のスタッフや運営管理の難しさ
販売代理店（物流）管理の難しさ
通信分野や他の製品の政府許可（認定）を取得する難しさ
ある国では知的財産権の保護が不確かであることや保護レベルが低いこと
ある国では販売代金回収の期間（サイト）が非常に長いこと
複雑な海外法規やそれらの処置に対応する事（コンプライアンス）が悩みの種
潜在的に、不利な納税義務（納税額が大きくなったりする）が発生することなど

これらはバリバリの米系企業ですら身に沁みて体験、遭遇している課題であり、単なる語学（英語ではない）の問題でない事は明白である。異文化の中（衣食住、法規、金銭に対する意識、信用・クレジット、人をどのような経緯で信頼するとか）での実務業務を如何にマネージ出来るかが、global 経営で越えなければならないハードルである。

初狩便り（3）

花野みぷり

味噌づくり

初狩の冬は寒く、戸外で農作業はできない。でも雑菌の少ない寒い季節だからこそやるべき仕事がある。味噌づくりだ。

大豆は耕作する人のいなくなった田んぼで育てた、この地域特産の「あけぼの」、大粒で旨い。前日の昼頃に水につけ吸水させておく。朝五時から大鍋で茹で上げ、熱いうちに豆引き機にかけてすりつぶす。力と根気のいる仕事なので、交代で引いていく。

もう一つの材料は米麹。山梨県産の米を使った麹は板状になっている。一粒ずつバラバラになるようによくほぐす。作業中は、髪の毛などが混入しないように注意を払い、麹がほぐれたら塩を混ぜる。

最後は、四斗樽にすりつぶした大豆と麹・塩を入れ、二の腕まで使ってよく混ぜる。味噌づくり一番の重労働だ。北側の米蔵に一年間保管して熟成させる。旨いかって？　はいそれはもう文句なしに。

『〝後期高齢者〟に思うこと』

中屋保之

昭和二十二年生まれ、言わずと知れた『団塊の世代』である。私もその一員で、誕生日を迎えると晴れて（?!）〝後期高齢者〟と呼ばれることになる。世相もまだまだ戦争の傷跡を留めていたであろうこの時期に生を受けた私たちは、その後、なにかにつけて話題を提供する存在となってゆく。

私の記憶の最初は、東京都板橋区の豆腐屋さんと八百屋さんに挟まれた借家から始まる。どういう経緯かは知らぬが幼稚園に入る前、今の家に移って現在もそこに住まいしている。幼稚園の名は「わかくさ幼稚園」といい、増えた子供たちのために新設された。従って、我々は一期生ということになる。萩原先生という眼鏡をかけた優しい女性園長を覚えている。少子化の影響なのか、数年前に訪れてみたが更地になっていた。

小学校も『団塊』を収容しきれずに、しばらくは午前・午後の二交代登校で、校舎も黒い木造であった）。世の中全体が貧しかったせいか、貧乏が当たり前、助け合って生きていた様に思う。が、貧乏五段階の下から二番目（？）の我が家にとって、文学全集など買えるはずもなく、親の苦労子知らずであった。そんな中、母がよく、私の同級生や母が懇意にしていた家に連れて行ってくれたのを覚えている。そこで私は、日柄読書に勤しんでいたのである。それが当たり前のように思えていた。我が家では揃えられなかった「少年少女文学全集」とか「世界文学全集」などという書物に私を触れさせるために算段してくれていたのであろう。また、受け入れてくれていた同級生の家庭も、子供とはいえ何の違和感もなく迎えてくれていたのである。少なくとも、小学校中・低学年の私は母の苦労には全く気付いていなかった。満足に、子供のために本を買い与えられない経済状態を憂いていたかもしれない。

若い頃、富山市で教師をしていた母は、私に教育者として歩んで欲しかったのではないかと思う。頭ごなしに〝勉強しなさい〟的なことを言われた記憶はないが、豊島師範付属小学校（現在の東京学芸大学、跡地は池袋西口公園

になっている）の受験をさせられ、人生最初の挫折を味わった。母に言わせれば、くじ運が悪かったのだとの事だが、真相はやぶの中。後年、バイオリンを習わせたかったなどと言ったり、結構、教育ママ的な一面も見せていた。

ようやく落ち着きだした世相を反映して新築なった鉄筋の校舎を後にして、たくさんの同級生とともに地元の公立中学校へと進学した。当時、その中学校はまだ木造の校舎だった。生徒たちが走り回る廊下は、そのたびに軋んで音を立てる有り様で、小学校のほうがはるかに立派で綺麗であった。『団塊世代』の廻りあわせなのか、私たちがこの中学校を卒業するときには新築の校舎から巣立つことになるのだから、まさに新しい時代を象徴する年代の『塊』であったろう。

中学校の最初の担任を覚えている。大学出たてで、まだニキビが残っているような可愛い女性教師で名を「山本郁子」先生と言った。フルネームで覚えているのは、あるいは、一人っ子であった私にとっての姉的な存在であったからであろう。

ちょうどその頃、六〇年安保騒動（一九五九（昭和三四）年から一九六〇（昭和三五）年、日本で行われた日米安全保障条約に反対する国会議員、労働者や学生、市民及び批准そのものに反対する左翼や新左翼の運動家が参加した反政府、反米運動とそれに伴う大規模デモ運動）で騒然とした社会情勢で、教師の多くがそのデモに参加していた。山本先生もそんな中の一人で、幼かった私は「俺たち生徒よりもデモのほうが大切なのか」と食って掛かったのを思い出す。

その後、私たち『団塊世代』の多くが大学へと進む世の中となってゆく。そして、ちょうど社会人となる一九七〇（昭和四五）年に再び安保騒動に遭遇する。更には、より過激な反体制運動を世界規模で広げた中心にも『団塊世代』の存在が見え隠れしていた。良きにつけ悪しきにつけ、私たち『団塊の世代』がその時代の舳先であることは間違いないであろう。とすれば、〝後期高齢者〟となる『団塊世代』は一体何をなすべきなのか、真価が問われている。

春初崇朝の桜台楼
妻に応えて作有り

桜台楼主人

孟春破暁　小斎の西
禿樹清閑として　遠靄低る
詩興陶然　佳境に入れば
風飄って忽ち現る好山妻

春初崇朝櫻臺樓應妻有作　平成十七年二月

孟春破曉小斎西　禿樹清閑遠靄低
詩興陶然入佳境　風飄忽現好山妻

（語釈）○崇朝…明け方から朝食までの時間。○桜台楼…桜を前にテラスがある作者の書斎。○孟春…初春。○破暁…明け方。○禿樹…葉の落ちた樹木。○清閑…世間の煩わしさから離れ静かな様子。○遠靄…遠くに見えるもや。○詩興…詩を作りたい気持ち。○陶然…うっとり酔うこと。○風翻る…風がつむじ風のようにひるがえる。○山妻…自分の妻の謙称。

（通釈）春の始めの頃明け方より朝食前の時、妻に応えて作る。

春の始めの頃の明け方に書斎の外を見ると、葉を落ち尽くした桜の木が清楚なたたずまいを見せ、その向こうには横浜方面の遠景が朝霞の中で眺められる。

詩を作ってみようという気持ちが壮んに湧き起こり、辞書を相手に佳境にいれば、忽ち一変、ドアは突然開かれ、出来ましたよ、食べるの？食べないの？とみめよい奥さんが現れた。

※この頃はもう少し婿養子の待遇を改善してもらいたいと頻りにおもっていた。私の書斎らしきものはテラスの入り口の狭い板敷きだ。筆を以て書の習い事もしたい。奥さんが洗濯物を抱えて「はいすみません！」と言ったら。小さな机を斜めに移動して、「はい、どうぞ」としなければイケない。何はともあれ興に乗った時に現れる。

文字通り無学の者は「吟」に関したり役立つものを何か身に付けたい。と漢詩作りに励むことにした。北九州の恩師が仰った「吟をやるなら漢詩を作る事が出来るようになったら良いね」との言葉に納得しながらの事でもあった。また、国語は苦手な科目だったが漢詩は嫌いではなかった。この方の事情は良いとして、素晴しいご縁を戴いて詩作を学ぶことになった。処が、とびっきり感動しなければ意欲が湧かない。やっと湧いてきた詩想が泡となって消えて行く。こんな状況だったが、今では飼い慣らされて、テラスを取り巻く木々や景色にこの上ない満足感を抱いている。この家から唯一、富士山が見える場所でもあるのだ。

在宇宙

今泉由利

浩然たり淑気をもちて自尤奇
沾露の蘇生　知不知
応見　無辺　千載の事
由来　生命　天涯に在り

浩然淑気見尤奇
沾露蘇生知不知
応見無辺千載事
由来生命在天涯

語釈

浩然＝ひろびろと　淑気＝つつましく

沾露＝うるおい　蘇生＝よみがえりくる

応見＝まさにみる　無辺＝はてしない

天涯＝非常に遠い所

大意

生命の由来が天涯にあるだろうことをつつましい心になって考えている。

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

寒さの効用

冬は陰の気、寒さの気
冬は養生の季節なり
夜は長くて、朝遅い
眠りの季節、寝て良い季節
眠りは養生の基本なり

冬は陰の気、寒さの気
寒さはからだに作用する
寒さにゃ、寒さの利があるぞ

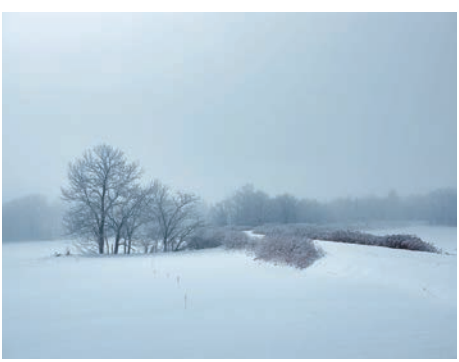
寒けりゃ動きが鈍るもの
動けぬ時は休むとき
しっかり休んで食べればよい
肥えてもＯＫ、この季節
しっかり食べて養う時
そしたら春から元気だぞ

冬は陰の気、寒さの気
寒さはからだに作用する

寒けりゃ縮み、凝り固まる
その気が、からだに作用する
内が圧され、温まる
内蔵・内燃・内の時
外は冷えても、内燃える

内の養生、冬にする
外の養生、夏にする
寒さにゃ、寒さに利があるぞ

冬は陰の気、寒さの気
適度に寒さを感じましょ
寒さ勝れば　風邪を引く
寒さ弱いと　締まらぬぞ
ぬくぬくするのも良いけれど
適度に寒さを感じましょ
陰気の作用は冬しか得られん



心と面（つら）

面は顔面、かおのこと
面には「いのち」があらわれる
「いのち」は全体「からだ」と「こころ」
　生きる働きそのものよ

生きる働き心（しん）による
心は心臓、「こころ」の心
心の華は面にあり
心の状態、面に出る
そのまま隠さず面に出る

面の肌艶・血色は、心臓生理をあらわすぞ
面の表情・感情は、精神「こころ」をあらわすぞ
「からだ」と「こころ」は文字通り、一心同体分けられぬ
楽しく幸せ明るい面、いのち元気にさせるもの
ストレス不安で暗い面、いのちを傷つけ病となる
面は「いのち」を左右する
「いのち」は面で変化する

面は隠せず、ごまかせない
よくよく鏡で見ると良い
己をよく見て、受け入れる

そのまま自分を受け入れる
そこから「いのち」が動き出す

人は面で交流し、
　交わり「いのち」が活性化
「面と向かう」が大切じゃ
人は表情・顔色を、面を通して感じ取る
人への理解は面による、相手の顔見て判断す

「面と向かって」感じたことは
そのまま相手に伝えるべし
己の面は見えぬから、他
者が伝えて気づけるぞ
これが交流、いのちの基本
人をわかりて、己をわかる
これが「いのち」の礼儀
　なり

明るい面を取り戻し、
面の見える世を取り戻す
これが病気を遠ざける、
薬いらずのあり方なり

「氷魚」のことから（253）

岡本八千代

いよいよ令和四年（西暦二千二十二年・昭和九十七年）になる。驚くなかれ、ああ私は百歳に近くなったではないか。…。

子・孫・曾孫などそれぞれの家族は、他で宿をとって、私に挨拶に来てくれたのだった。嬉しかったけれど、私は思うように動けなかったので、むしろ悲しかった。

冬になって、少しの間で私の体力は衰えたのだった。これが人生の流れというものか。

此の夜は、斎藤茂吉と久保田不二子と選をした赤彦歌集を中心に書くことにした。この中に、赤彦は子供の歌を多く作っている。その中にあった赤彦の子供の歌に私は感銘を受けた。抜粋してみる。

○たまさかに帰れる父のかたはらを寂しと思ふか子どもは眠る

○眠りたる女の童子の眉の毛をさすりて我は歎きこそすれ

○ちちのみの父帰れども寂しきか子はものを言ふ父の膝に来て

○かへり来て家にいくらも居らぬゆゑに眠れる子らの顔を見てをり

この頃の赤彦は東京のアララギ本社へ出て中心になって働いていた。十二月二十六日、茂吉・重と共にアララギを校正していたのだった。こんな歌もあるくらいだった。

○工場の音はたと止み夜は寒し三人だまり筆を動かす

赤彦は東京本社（アララギ）でかなりよく働いた。いや盡したといった方がよいかも。

はじめの方、子供の歌など奥さんがいなかったのかとしらべたけれどそうでもなさそうだった。父親として、子供を愛する感情がよく表現されていると私は思う。子供たちも父親を親っているなという表状もわかりやすくあられさえある。現代の日本社会の親と子の関係も変わりはないであろうが、歌によっての子供を思う気持ちはなかなかうるはしい。私は赤彦の作品、他に「歌道小見」などを読んで、かなり正岡子規的、伊藤左千夫的ある中に赤彦でなければならの感情の美しさ、あわれさの表現がすばらしいと思う。赤彦の歌集「氷魚」に感銘した私は、更に赤彦の書いた「歌道小見」にも感じ入っていた。この本もやはりその人の心の表現、抒情が大切なことと言っている。そして小さい子供には無理だと言っている。だから小学生や中学生ぐらいはまだむずかしいと言っている。短歌は自分の理屈をのべるのではありません。自分の心の中に浮んでくる感情を歌う。やっぱり数多く自分の心を歌ってゆくものです。その時、その時の自分の見たもの、花なら花などが歌いこまれてゆくものだと思います。

今はコロナでたいへんな時です。なんとか自分を送りたいと思う。お父さんに会えるか会えないかは全くわからないままの一日一日を信じて、暮してゆきたいと思いつつペンを置く。また茂吉のこととは少し離れつつ。

編集室だより【二〇二一年十二月】

今泉由利

○阿倍仲麻呂、奈良時代、遣唐留学生。唐に渡り、名を朝衡と改めた。

天の原ふりさけ見れば　阿倍仲麻呂
三笠の山に　出でし　春日なる　月かも　と和歌を。

中国名、晁衡となり漢詩版を。

望郷の詩　晁衡
首を翹げて東天を望み　神は馳す奈良の　辺
三笠　山頂の　上　想うに又皎月円ならん

カーテンを、しっかり閉じ、漢詩と吟じ、和歌と歌い…漢詩と吟じて涙を流し、和歌と歌い涙を流し…何で涙が出てきてしまうのだろうか。外国にいて日本を思う心、父と母と遠くにいて、いつ合えるのか…。同じ経験をしたから。時代も国も異なっても、心とは。吟じるということは、心を吟じることなのだと知る。泣いてしまうほどのことには、素直に涙を流して生きていたい。

○点けたままのテレビより聞こえてきた。サンマリノ共和国。マンリオ・カデロ氏……。

今は昔、学生時代、テキスタイルの勉強に、イタリアへ行こう！と、イタリア語を習いにいっていた。そのイタリア人のイタリア語の先生の名前なのだ！何十年も前のことが、ポカンと蘇ってきた。イタリア語の先生は、とても偉くなっている様子だった。

イタリアは後でゆくことにして、アルゼンチンへまず着いてしまったけれど、アルゼンチンでは、イタリア語が、とても役にたった。

○武田信玄の奥三河。山また山、飛行機に乗って、上空から見ないと、全容が見られない地主のやす子さんは、父の弟の歯科医師に嫁ぎ、私と同じ敷地に住んでいらした。大変に美しい人で、絹の話の今泉雅勝さんのお母さんです。海辺に住んでいた私達に、山の生活を沢山教えて下さいました。もっともっと沢山教わればよかった。あの頃にもどりたくなる。

○十二月二十九日に、NYの子達飛行機に乗って、日本に着くなり、そのまま二週間の隔離。京都から届いた二段重の節を。冷凍庫に押し込んだ。大変なことが起っていることを、何とかならないだろうかと、一生懸命考えて…何を、どうしようもないことがわかっただけ。生姜とか、デコポン…もう思いつかない。おとなしくお家に籠っていよう。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
TEL　〇三-五九二四-二〇六五
ケイタイ　〇九〇-八四三四-八六四六

◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行　今泉由利

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
編集室までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和三年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。